

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると〜(使徒 2:1)」。日が「来て」の原意は「満ちて」。日本語として不自然でも、意味は直訳がふさわしい。

時の流れではなく、その日が「満ちた」がゆえに、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ〜家中に響いた(2:2)」のだ。

聖書ではないが、あるラビ文書には十戒の興味深い説明がある。「十戒はただ一つの音で発布されすべての民がその声を理解した。声は十に分かれ、七十の言葉になった」。聖霊の言葉とは、こうした「一撃」ではないのか。

問いか、祈りか、「それ」が満ちると、一つの音が与えられる。すると聖霊の言葉は「その人」の母語となり、耳からではなく、心で「めいめいが生まれた故郷の言葉で聞く(2:8)」。

禅門(臨済宗)の雲水は各々、師家(指導僧)から公案(謎めいた問い)を与えられる。アンチョコのような公案集「碧巖録」や「無門関」は岩波文庫でも読め、内容は荒唐無稽。

謎を抱えたまま修行の「日が満ちる」と、師家はふいに大声で「喝っ」と一撃する。するとたちまち無明に光が射すらしい。

キリスト者は折々に、劇的であったり、気づかぬほど静かであったり、パターン化できない聖霊の一撃を受けている。

五旬祭、弟子たちが受けた聖霊降臨は、相当激しい一撃であった。この時の聖霊降臨は、復活から続いて教会の出発点だと見なされるが、個人が受ける聖霊一撃は教会暦に限ったことではない。

一人ひとりが抱えているものが「満ちる」と、聖霊の一撃を受けて何かが啓かれる。

五旬祭、日が「満ちて」、「一同が一つになって集まっている(2:1)」。集まって何をしていたのか。心を合せて熱心に祈っていたのだろう(1:14)。一致した祈りの上に、激しく聖霊が降った(2:2)。そして聖霊は「炎のような舌が分かれ分かれに現われ、一人一人の上にとどまった(2:3)」。

霊は唯一であるが、一人ひとりの異なる賜物として現れる(1コリント 12:8~11)。宗教的な陶醉があったとしても、全体としては落ち着いていて、キリストの体(教会)が作りあげられるために益となって働く(12:7)。

私たちは己が名を呼ばれ(ヨハネ 10:2)、十分に私でなかった所まで呼び出されて、いっそう私自身になっていく。唯一の霊がキリスト者一人ひとりに分かたれ、各々の霊が響き合う。

私の上にとどまる私に固有の炎の舌は(使徒 2:3)、神の霊であり、キリストの霊(マタイ 8:9)。そういう形で唯一の霊なのだ。

聖霊の炎は外側から注入されるものではない。祈りが満ちると(使徒 2:1)、一撃が与えられ(2:2)、一人ひとりの霊が共振する(2:4)。すると炎は内側から燃え出でる(2:8)。

聖霊は、語る者と聞く者の双方に降って働く(1コリント 12:10)。聖霊の響きがない傍観者には、愚かな酔っ払いに見える(使徒 2:13)。

五旬祭(七週祭)には恵みを(申命 16:10)、周囲すべての者と共に喜び祝う(16:11)。「あなたがエジプトで奴隷であったことを思い起こし、これらの掟を忠実に守りなさい(16:12)」。

聖霊によって自由を得ているから、何が奴隷状態か判断できる。あらゆる立場を超え(16:11)、各々の霊を響き合わせる。



《おまけのひとこと》

危っかしい子供時代 火薬を鉛筆キャップに詰めて爆弾作りを試みた 幾度やっても隙間から間抜けな炎が噴き出す 火薬は「満ちて」炸裂する 聖霊降臨は鉛筆キャップくらいの間抜けさがいい